

丸薬つんでおはするは河津殿の後家御様(本領貫注)

「丸薬指もちち差かむを紛らすわざで、玉指指ふの類である。「たまむしひろふ」を見よ。

*くわんれい 斯波左衛門義將は當家の管領たるによつて(靈女)

「管領」將軍輔佐の職で、鎌倉の執權と同じものである。初めは執事と云つたが後に管領と改めた。管領とは統轄の義であつて職名ではなかつたが、後には定まれる名稱となつた。

くろ 「人でもくひでもない」男でもくひでもない」を見よ。

くゑにち 何くよくよとくゑ日の、悔むもよしな引寄せて(大經師)

「凶會日」舊曆上の語、何事を成すにも凶なる日。大雜書寛永十一年刊に「くゑ日。此日なす事何にても末の遂げにくき日なり、わろし。曆日講釋に、「あしき事集ると云ふ日なれば一切の事に用ひてあしし、まりながら吉日にはあらねども中の凶日なり。假名雜註解に、「凶會日。天地の陰陽相會して徳を失ふ日なり」。この文、大經師に纏ある處の語を用めて文を飾つたまでである。

*くゑまんんだら 九會曼荼羅の麻衣、兜巾・篠懸・法螺の貝(藥師)

「九會曼荼羅」九會には眞言密教に立てる名目で即ち、(一)印會、(二)理趣會、(三)降三世會、(四)降三世三昧會、(五)成身會、(六)羯磨會、(七)微細會、(八)供養會、(九)四印會である。「曼荼羅」は梵語(Mandala)譯して輪圓具足と云ふ。九會を完全に圖示するものを九會曼荼羅また智曼荼羅と云ふ。謡曲安宅に「兜巾といつぱ五智の寶冠なり、十二因縁のひだをすまて戴き、九會曼荼羅の柿の篠懸

云々」。

くをんごふ 一心一念の本佛は無念の佛より教を受けて久遠劫、悟あれば迷あり(兼好)

*くゑんごふ 極めて長大の時間をいふ。億萬劫。「久遠劫」

くんだらやしや 「くゑんごふ」を見よ。

ぐんない 羽織も交せて郡内の、仕末して着の淺黄裏天綱鳥) 年は三九のぐんない綿、血しほに染みて紅の(菅原甲)

「郡内」甲斐國郡留郡を郡内と云ひ、その地より郡出する綿織の名。郡内は貞享初年から元祿享保にわたつて最も流行し、暗の衣裳に九るので、かの三勝も八百屋お七もその最期に郡内を着てゐた。されば郡内の語に深長の意味がある。「三九の郡内綿」といへるは、二十七歳に算筋の郡内綿をきかせた。

け

*け 侍業は皆留守なり、股は御酒の寐入ばな けにもばれにも喜三太とみづから(源靜)

「寝」なれて常とすること。ふだん着物の義。「寝にも暗にも」とは、ふだんにもよそ行きにも、即ち如何なる場合にもの意。狂言記舟ふなに「こなたなことは寝にも暗にも歌一首と申しますが。」

*げ 一遍の念佛、一偈の經も讀む間なく(弁橋)

「偈」梵語(sha)を御院また佛院と書き、譯して眞蹟また云ひ、韻文體の經文をいふ。佛院を略して偈といひ、また頌を添へて偈頌ともいふ。漢譯のものは四言或は五言などに疊まれて四句に一偈をなす。

けいあん 四つ當年の御吉けい薄げいあん、めつきり今歳は若うなる(靈女)

按摩取、お鬘の座取り百千鳥、口口囀るうそ咄し(兼好) 扱も出來た遊ばず遊ばす、米取る能太夫も跣足ぢやと、慶庵とりどり御機嫌伺ふ折節、酒香重々 祈經護ひのけいあん侍、大磯邊方方を晝夜徘徊仕ると承る(虎が屠)

*けいあん 慶安とも書く。輕薄。機嫌を取りおめること。好色大鑑(元祿五年刊)に「輕安は輕薄に同じ。立羽不角編・併諧水馴禪、兎手柏の巻に「拳加樹に慶安共の圓機。偶言集覽に、洞房語園を引きて「承隆の頭京橋の邊に慶庵といひし醫者ありしが、療治はかたの如く下手なが能く人に追従し、時時嚙をつきして、誰がいふとなく輕薄がましきもの事をけいあんらしいといひふれて、終にはやり言葉となりしなり。」

*けいはい 獨坊主の庵室なれば女人ばけいはいけいはいと、ぎごつなげにぞ返答ある(大原問答)

「けいはい」(結界)の延びた語で、「くわつつけ」(活語)であらう。序に云、その條を見よと云ふ語であらう。序に云、關西言葉は關東言葉ではつまるもの延び、延びるものがつまつていふのが往來ある。「けいはい」を見よ。

*けいけい わ 龍猛大師に轉傳し、大くわうちりけいけいけいけいに至り(呂昌波)

「龍果」西域青龍寺の高僧で第七祖に當る。

けいけいはたはたほろろち 閉き羽番ひ劍嘴にけいけいけいけいはたはたほろろち(唐船術)

「けいけい」は「けんけん」變つた語で、雉子の鳴聲をうつした語である。「はたはた」は雉子の羽叩きの聲。「ほろろ打」は、雉子が翼をこすりてほろほると鳴し羽叩きすること(序に云、玉葉集に「ほろほると鳴く山鳥の聲きけは」と見え、方丈記に「山鳥のほろほると鳴く」と見え、あるもの、ほろほるとはその實鳴く聲ではなうて、翼をこすりて鳴す音をかくいうたのである。

*けいこく 爰に傾國好色の遊君(三世相)

「傾國」美人をいふ。また以て遊女をいふ。漢書外戚傳に「北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。白居易の長恨歌に「漢皇重色思傾國」。

*げいしや 浪華藝者の風俗を橋橋名所に擬へて書集めたる藻鹽草(今官) 藝者の首法師(聖徳太子)

「藝者」歌舞伎役者。藝人。

*げいしやう 帝を始め卿相雲客大夫諸侯に至るまで(大雜冠)

「卿相」公卿と同じ。支那では三公九卿といへども、我國では攝政関白、太政大臣、左右大臣、内大臣を公といひ、大納言、中納言、三位以上の人人を卿といふ。奏議は四位にても卿といふ。

*けいせい 君けいせいといふ者は、此類での王様、それから段段あるうち、おぢやれの身には何が成る舟波與作 母が命が一夜も死んで見せませう(靈門松) こなた業の

「舟波與作」母が命が一夜も死んで見せませう(靈門松) こなた業の

俺が見苦しい姿である故をかしいさうなが、この男も傾城づかを握つたなれの果ちや(傾城佛屋) 傾城こまめにたらひが女房、請出したらひの底抜けて、影も宿らぬきぬぎぬの(審門松)

〔傾城〕美女をいふ。よつて以て遊女をいふ。漢書外戚傳に「北方有佳人、絕世而獨立一顧傾人城、再顧傾人國」。この語大江匡房などが既に用ひてゐるから、古くから用ひられたものである。

〔傾城杖〕傾城を揚げて遊興する費用代金。〔傾城柄を握る〕とは、傾城通の秘人としてはばをきかすをいふ。〔柄〕は昔探つた柄柄などいふ柄と同じ意の語である。色道大鑑に、〔柄を握るは當道を好みて道を嗜む心なり。〕

〔傾城こまめにたらひが女房〕とは、傾城はよく腰湯を使へばかく云うたのであらう。この文に「たらひの底抜けて影も宿らぬ」とあるは、その條を見よ。

〔傾城冥加〕といふもある、その條に説く。*けいせいみやうが 吾妻を見込んで頼むとばいとらしい老嫗様、傾城冥加聞(氣で)こんす(審門松)

〔傾城冥加〕遊女自誓の詞、傾城の我が甲すこととが違つたら神佛の冥加に盡きることあり、神佛かけて誓ひますとの義。〔冥加〕は神佛が冥冥の中に加護を垂れ給ふ義。この冥加また冥利を其人の身分また職業の下に附けて、傾城冥加、侍冥加、武士冥利、商賈冥利、番屋冥利などと言つて、其人の自誓の詞に用ゐたものである。

けいせい 旃檀・鷓舌・沈水香・丁香香・安息香(鷓迦)

〔鷓舌〕鷓舌香である。西陽雜俎に「一木四香、根曰旃檀、節曰沈香、花曰鷓舌、葉曰薰陸」。名義集三に「異物志曰、是草葎可合香、護外國胡人說、衆香共是一木、華爲鷓舌香」。

陸に。名義集三に「異物志曰、是草葎可合香、護外國胡人說、衆香共是一木、華爲鷓舌香」。

*けいせん けいせんといふ者始めて見た、やつぱり常の女子ぢや(夕霧) 我々がなんば沙汰を致さずとも、あのけいせんは沙汰を致されず、それを言はずにゐませうか(夕霧)

〔けいせん〕傾城をけいせんといふ語に變じたる語。〔城をせんといふは支那音(Hong)から來たといふ説もある。三島龜貞享四年刊「卷之四に、くろわのけいせんをうけ出し、おく様になさるの様子承り。安原貞室撰かた書(慶安三年刊)に、傾城をけいせん。當世大和言葉中に、傾城をけいせん。〕

けいせんくわ 辛氣燃して待つ宵に、似たりや似たりけいせん花(生玉)

〔生仙花草花の名。この文は、傾城に桂仙花をいひかけたのである。そして、謡曲・杜若に「似たりや似たり杜若花盛満」とあるを作り替へたのである。*傾城

〔鳥は高く飛んで燐七の雲をのがれ云々〕を見よ。

けいばう 頼光が將軍職を某けいばう仕らん(酒吞童子)

〔鷓舌〕きそひのぞむこと。増補下集(寛文九年刊)言辭門に「鷓舌」。

けいはく 先づ當年の御吉けいはくけいあん、めつきり今歳は若う



なる重女、身こそ貧なれ、一文一錢合力は受けまいし、何輕薄がいひたからう(卯月調色) 生みの母の追出すな繼父の我等輕薄らしう留められず(安登) 面白からぬ輕薄酒に氣がつき果て(扇八景)

〔輕薄〕へつらくこと。謡曲・卷之五に「輕薄。今俗にかつらふしく輕うすき者を輕薄者といふ。但言葉覺に、輕薄。俗に習熟を云ふ。〕

けいひつ 月雲客供奉せしめ、ばや聲蹶とよば(龜九)

〔聲蹶〕出づるに響し入るに響すを見よ。(さきおととは別である。)

けいらく 終に一息切斷の、經絡六脈絶え絶えに(二枚繪) 晴に血わたをつられ三寸ばかり脱出でたり、經絡續きて二つの瞳尊の袖に入るよと見えしが(持統天皇)

〔經絡〕筋肉のなかり。時珍に、「凡人一身有經脈絡脈、直行曰經、旁支曰絡。〕

*けう けうの駿馬を引かるる段大悦始んと身に餘れり(十二段)

〔希有〕常には無いと云ふ義。怪しいこと。珍しいこと。徒然草、第六六段に「口ひきける男あしひきて、聖の馬を頰へ落してけり、聖いと腹あきしてかかて、こは希有の狼藉かな」(龜谷物語・古淨瑠璃第一)に「かがるけうなる者鳥何方より得であるぞ。〕

*けう さてもけうがる坊主やと、旅人もどつとぞ笑ひける(本領書) ああいづれも、性のよい兄貴にて、年寄られて親仁の苦勞でござ

るといひければ、それをばけうがる今聞いたと、頭を振り顔をしかめける(二枚繪)

〔興(きよう)〕を見よ。けうがるは興がある。滑稽味を帯びて變な面白味のあるをいふ。調經であるといふ程の意。謡曲・鉢の木に「けうがる法師なり。〕

けう げうをいふ。我等が宗體と申すはけうべつてん(用文章)

〔教外別傳〕禪宗の他の宗旨は經論の文句によつて教義を説けども、禪宗では言教の外に別に心印を單傳し、以て心傳心、師資相承する。教外別傳とは即ち眞理は言語文句では傳へられぬ、教外に別に傳へるべきものであるとの義で、言語文句を離れて直に佛心を以て他心に傳へるといふのである。但これが爲に經文を等閑にするといふのは勿論ならず、要は眞理を得るにあるのである。教外別傳といふ詞は達磨大師の唱へはじめたものだといはれる。

けうこう 「きやうこうを見よ。)*けうしよ 鬼王・團三郎後見してもり立つべしと、御判の御教書たびければ(加増書)

〔教書〕將軍の令する書。中古以來攝政關白、大臣等の令する書を教書と稱し。頼朝鎌倉幕府を開き、教書を以て天下に令せしは、蓋しその稱を擧げたのである。教書には御判御教書、御書御教書、御文御教書、御印御教書、安堵御教書、御請御教書、召文御教書等がある。

けうす 「きやうすを見よ。)*けうとい 紀の國屋の杉がけうとい顔付きにて(天細書) けふとや柿かけをきり米望み次第ぞや(藤原歌)

けいせいみやうが けうと

【けろ】即ち八氣味の義。轉じて、氣味わるい。柿。徒然草三十段に「からけろ味き山の中にをさめて、さるべき日はかりまうてつ見れば」。謡曲、伏木曾我に「草の野原の夜のけしき、風よきときの夜の雨に、神さへ鳴りてけろとけれども」。

*けろとなげ ええけうとなげな、身も顔も泥だらけ(女殺)

形容詞「氣味なし」の語根に、事物の形状情態をいふ接尾語「け」の添はつた轉成名詞「氣味なし」の「なし」は「あらげなし」その條を見よ(の「なし」など同じ語で、甚だしい意を示す。「けろ」といふ條を見よ)。

けろまん・がまん 五體を締め身を顛はし、僑慢我慢の勢絶えて(振袖始)

【僑慢・我慢】僑慢は、倨傲で己が分を省みずして他に傲ること。俱舍論に「獨由染三目法、慢對他心羣」。我慢は、自己を尊大となして他を輕蔑すること、七慢の一である。

*けろやう 敵を討つて候。上は、只父母がけうやうには君御出世の御訴訟こそあらまほしう候(彌九)

とりわき五郎が悦びは母の不興を許され、父母けうやうの弓馬の道(五人兄弟)

【孝善】孝行。また轉じて、供養。親無縁壽經に「孝善父母、奉事師長」。源氏物語、常盤の巻に「いとけろやうの心深く哀れなりと見給ふ」。平家物語、卷六、入道逝去の條に「我いかにもなりなん後、佛事孝養をすべからず、堂塔をも立つべからず」。

けうよく 六塵の樂欲多しといへども(兼好)

【樂欲】ながむ思ふこと。あいぢやくの道その根深く云々を見よ。

けがき 懷中より時宗が夏書しかけし普門品を取出し(百日曾我)。一夏に一部げがきせし、大慈大悲の普門品妙法蓮華きやう橋(天網島)

【夏書】夏曆九月十日間に經文又は信所する佛名を記すを云ひ、この事實時は俗間に仰はれ、遊女の間にも行はれたのである。無川道祐撰、日文紀事、四月初八日の條に「凡男女一夏九日之間、毎日習筆法、又或記所信之神佛名號、是謂夏書」。能談通書、畫體の部に「夏書、佛信心する佛の名號を帳に括書く、卯月八日より七月十六日迄毎日怠らずつとむる」。

げきしゆ 龍頭編首を見よ。

*げきやう 北斗を拜して加行なせば神通變化心の儘にて候(本領曾我)

【加行】修行力を加へる義であつて、灌頂受戒などの儀式を行ふ前に準備修をなすこと。唯識述記九に「舊云方便道、今云加行、顯與佛果善行差別也」。

げきやう 女に醫者でない、身はげきやう、いに醫者で懲りた者(天神記)やれ醫者坊よしくやうよと、呼びにつかへば聞違へ(天鼓)

【外氣】字林拾葉に「外氣」と書いてある、外科治療。按摩、鍼灸などをいふ。

*げきりん 頼平朝敵となるその咎逆鱗甚しく(關八州) 下萬民の恨、上一人の逆鱗やすからず(千正犬)

【逆鱗】帝王の怒を云ふ。韓非子、說難篇に「夫龍之爲蟲也、柔可狎而騎也、然其喉下有逆鱗徑尺、若人有嬰之者、必殺之、人主亦有逆鱗、說者能無嬰人主之逆鱗、則獲矣」。

*げく 悲しむことも何にもない、け

くで浮世が面白いと、笑うて見せて力を付け金懸 私等に如在はなれものな、恨がけくできこえぬと、邊を忍びしくしくと、泣きくどきてぞ語りける(水朔日)

「けくく(結句の促音)の脱落した語で、「ががつん(合點)をががつんといふの類である。つまり、かへつて。結句は詩の末句の稱から起つた語である。けくはけくけく(上求菩提下化衆生)を見よ」。

げげはな つつじげげはなつばすみれ(十二段)

【繁雲英】げげはな「れんげ」れんげ「きやう」などともいひ、田野に多い越年草本、莖は地を這うて據がり、夏時長莖を出して、縹紅紫色(稀に白色の花を開き、黒き莖に實を結ぶ。げごちけんいん 幽靈の額に外五鉗智拳印の祕印を結びかけ給へば(饑餓天皇)

【外五鉗智拳印】外五股智拳印とも書き、外五鉗印と智拳印である。「印」はその條を見よ。五股印は眞言宗にて五智五大を表示する印相である。即ち兩手を合し、二小指二中指二

【相印股五外】

【相印拳智】

頭指二中指にて五鉗を形成し、左右の無名指を交叉して、その指端を掌内に容れるを内五鉗印と云ひ、指端を掌外に出すを外五鉗印と云ふ。智拳印は金剛界大日如來の結び給へる

印相である。

けこみ 此門一つ押破るは易けれど、跡より寄手の込入るもかしまじし。上へそつと持上げて蹴込の下より落し申さ(蝦山遊)

【蹴込】家の上りの畜脱の下、即ち土臺附の處。但この文では門の下端。

*げこん それが己が下根ゆる、目に見ぬことの覺束ないと吐した(國性後日)

【下根】根は機根の義。根は物の本となる力、機は發動の意。即ち教法を聽いて修證される能力をいふ。下根は、機根の劣つた人で、道を修めるに就いて能力の弱小なを云ふ。

げこんあごんぼう げごんぼ かがのこんぼけいんぼからし(こ山椒の粉(天經師)「けごばう(毛牛蒡)の說。小根の多く附いた牛蒡。

げさいろく ちよこさいなげさいろく、えら骨ひつかいてくれべいと、くらはす拳を請外してはぶち返し(女殺)

【才六】才二才と云ふ程の意。狡黠な者を罵つていふ。理窟隨筆に「面の書きを俗語にさうくとさふ。さいろく」は「丁稚をいふ。南瓜咄に「昔都の側に其の名を得たる武士ありけるが、小者の名をば才六と附けたるなり。いかなる子細ぞと問へば、小者をばでつちといへる義なりと云ふよよく考へて見れば、六の裏は一ちや程に、さてこそでつちちやと云ふ」。

けささ 大峰葛城那智熊野でけささ

もならぬこの法師(本領曾我)

「けさまはし怪障」の略。物語の變化の稱。御前義經記正徳二年刊三之巻、近江の waterfall の條に「是は娘が生靈船中を幸にけさまをなすに見えたり」。

*袈裟にかけて斬る 掃部手の肩先より袈裟にかけて斬落せば(大藏虎) おまんが左の肩先より、前は乳房を袈裟掛に兩へさつと斬下げられ(薩摩歌)

恰も僧侶の袈裟を掛けやうに斜に肩から懐脇にかけて斬下るを云ふ。
げしう 見奉ればげしうばあらぬ御有様、怪しや語りおはしませ(舞允) げしう逢はせまいならばこゝで腹を切らうかと(反魂香)

正しくは「げしう」で「異しく」の普通である。異(異なる)の語。萬葉集卷十五の歌に「異情乎安我毛波奈久爾」とありて「異」を「けし」と識んである。伊勢物語に「むかし男けしうはあらぬ女をおもひけり」。増鏡おどろの下、宮内卿のことを記した條に「こたみは皆世にゆりたる古き道の者どもなり、宮内卿はまだしかるべけれどもけしうはあらずと見ゆればむ、かまへてまろがおめておこすばかりよき歌つからまつれ。増鏡むら時雨も「主なき院の内にと淋しくて、衛士のたく火もかげだに見えず、内にはいつしかけしうかぶるなど様みつきて、或時は紅の袴長やかにふみたれて、火ともしたる女見るまに丈は軒と等しくなりて、後にはかきけち失するもあり」。

*げしからず 門前の人音けしからず、敵の來るこざめれ(日本武尊) 「げしう」の引例に擧げ大増鏡むら時雨の中

に見える「げし」の語を、後には「げしからず」といふやうになつた。怪しい。奇怪である。謡曲・隅田川に「御出で候あのけしからず物騒に候は何事にて候ぞ。謡曲・望月に「あれに候は此宿にある旨御前にて候が、げしからず面白く謡ふ由を申し候」。

*げしかり 武家に生れてかほどの事辨へぬ不覺の女、とくとく歸れと、御氣色甚だげしからず(三國志) 景氣ある義。面白く思ふに「異し」の轉義であらう。増鏡おどろの下、水無瀬釣殿の御遊を記した條に「妻のながしと云ふ御隨身勾欄のものと近く候ひけるが、承りて池の汀なる笹を少ししきき白き米を洗ひて奉れり、ひろはは消えなむとにや、これもけしかりわざかなとて、御衣ぬぎてかづげさせ給ふ」。

*げしとむ 傘にや怖れけん、早廣が乗つたる馬俄にけしとみ跳ね上り(鰐丸) ときの聲を聞きふれて、百萬人の列卒鼓げしとむ事の候はず(大藏虎)

「げしとぶ」清飛の説で、魂清飛と義であらう。驚き廣く。種笛・古舞踊謡(第二)に「木の根にけしとみ石塔の陰にかつばと舞ぶ」。菅原傳授手習鑑(淨瑠璃)に「奥にはばつたり首討つ音、はつと女房胸を抱き、踏ん込む足もけしとむ内」。

芥子の紅鹿子 憂さなもけししの紅鹿子(藤門松) 芥子實のやうな細小白の斑點を染出した紅の鹿子絞。この文、憂さを消しに芥子をちかかけたのである。

けしはうず 鞆頭頭の芥子坊(主國性齋) 「芥子坊」主頭髪を剃つて頂上のみ髪を長ら護

したもので、その形擧葉の實に似たれば云ふ。擧葉。

*げしやう さいた刀はげしやうか伊達か(善盤太平記) すれば入らぬ假粧わざ(薩摩歌) 「假粧」見えをつくること。飾。

*げしやう 濕生化生はいさ知らず、體を受け生れし者人間も畜生も出世の門は唯一つ(釋迦) 勝頼きつと見、御身を固め物陰傳ひに忍寄り、化生すばと尻目に睨み(川中島) 「化生」依託する所なく忽として生じ現れるの書であつて、即ち神また變化、妖怪の類。俱舍論八に「有情類、生無所託、是名化生、如那落迦天中有等、具根無心、支分頓生、無而教有、故名爲化」。ろくどうしやう」をも見よ。

*げじやう 勳功げじやう望みに任せらる(へし(鶴山遊) 「げじやう(勳賞)の略語で、人に善行を勧める爲に賞與する義。褒美。古院本(山本九兵衛取七行本)のこの文に「勳賞」とあつて「げじやう」と傍訓してある。巢林子作・源義經將素經の古院本に「時には汝等道ある勇士の手本ぞと、くん切けでうほまれを取子孫々(五三)とある。くん切けでうほる勳功勳賞」の誤である。(この語音は管貫と書いてもあつて「くわん」のやうとは讀まなかつた)。

*げじやう 京のお役所から此處の代官所へ解状がついて在在を尋ねる(大經師) 「解状」目安書とも云ふ。訴訟文書などをわかり易いやうに簡略書にしたものを罪人逮捕の下文。

*げしやくばら げしやく腹の姫君

いてふの前(反魂香) 「外戚(外下)腹とも書いてある。妻腹。和訓琴に「げしやく。俗にげしやくはらなどいふは外戚の義也といへり、庶腹をいふ也」。

げしめ 忽ち紺地金泥のげしゆの文と現はれて、光明天に滿ち満ちたり(聖徳太子) 「偽類(偽類)頌頌ともいひ、韻文體の經文であつて、四句を以て完備した意を表はし、五字又は七字等を以て一句とするを普通とし、多くは佛の功德をたたへまつるもの」。

*げしん 誂物も節季をどう仕舞はんすことちややら、下心の悪い且那殿(重井筒) 下心の悪い、泣いて、口説くそ哀れな(歌念佛) 「下心」心底。心掛。五十年忌歌念佛のこの文意は「下心の悪い」といふ言葉は多く淨瑠璃に語られる言葉である、その淨瑠璃言葉に田舎者が何處で聞いたのか、かういふ時に言ふことと心得て、泣いて口説くことの哀れぞとの意」。

けぞくちえん 本高じやくげの秋の月照きさすといふ處なく、化俗結縁の春の花匂はぬといふ袖もなし(百合老) 「化俗結縁」世俗の人を教化して佛縁を結ばしめること。和光同塵をも見よ。化俗は「化屬」と書いてもある。化屬は佛菩薩が教化すべき眷屬の義。

*げたい 唐琴を身請とはちつとすしなぞ推參なぞ、ええげたいの悪い、聞くより富樫くわつとせき上げ(蛙合戦) 「身請」易をたてて卦にあらはれたこと。轉じ

袈裟にかけて斬る—けたい

て縁起。氣持。狂言・居杭(大蕪流)に「まづ今日の卦體がとうとこれに當つて居ります。色道後日男(卷四)に「かかる卦體のわろい時は所をかへてなぐさまんと」と。

けだいがくもん なう書面ばかり聞きはつり、義理を知らぬは外題學問これ笑ひぐさ(蛙合戦)

〔外題學問〕書物の内容を精微研究するのではなくて、題簽を見て書名に能く通じてゐること。本屋學問。

げだう 四章賦と號す外道の書、この法を學ぶ者は因果を撥無し來世を期せず(用明天皇)

〔外道〕佛道の經典を内典といひ、佛道以外の書を外典と云ひその道を外道といふ。恰も儒家が佛以外の道を異端といふの類である。法事語に「佛言を取らざるを外道と名づけ、因果を撥無するを見て定となす」。

けたたましい ああ心もとないけたたましい、何事が起つた(生ま)

女房ちやくと袂にすがり、けたたましい御顔付、月代も遊ばして、いづ方への御出ぞ(聖徳太子) お暇申すと立出づる、餘りといへばけたたまし、今宵一夜は苦しがるま(露門松) けたたましい提灯金棒ちんからりが面白いか(關八州) 氣立ちておちつかぬ義、あわだたし、ことごとし。

げだつ 戀慕に沈む衆生を救ひ、解脱を示さん爲に二菩薩かりに出世(三世相)

〔解脱〕無碍・無拘・自在の義。生死の迷界にある者は煩惱に束縛されて自由でない。然るに佛法によつて煩惱無明を斷じ妙諦を得たら

ば、生死の迷界を出でて無拘自在のものとなる。これを解脱といふ。

げだん 上段下段の太刀さばき(國性爺)

〔下段〕劍道の語。太刀を前に低う持つて身がまはますこと。

げぢ 日本流の軍の下知(國性爺)

〔下知〕令下知一の意といふ。さしづ。命令。文德實錄に「宜早下知、真令然」。

げちえん 心あらん者どもは繩に手なかけ結線せよ(倉積山) 一つは御祈禱且は結線、出御あべしと奏すれば(弁簡)

〔結線〕成佛得道すべき因縁を結ぶこと。すには、姫婦安平子安の法(彈丸)

〔結線〕佛會・修法或は祈禱をなして、その終末の日に修行作法。

げちみやく あなたの友としては血脈一つに數珠一れん、これが冥途の友となる(夕霧) 息の通ふその中に夫婦のしるしを見せ給へ、それを冥途の血脈といふ引導とも回向とも思つて(用明天皇)

〔血脈〕法門の相承を身體の血脈相通つて絶えなからぬに喩へた語である。密宗では相傳口訣を重視し、その血脈を記すに一定の法があつて、付法八祖以下の師資や諸頂の年月日を記す。淨土宗・日蓮宗にも血脈を授ける。そして一宗の要義を傳へたものを法脈といひ、受戒の相承を戒脈といふ。俗人結縁者に授けるには、法門相承の略系譜を記して、その包紙の表面に戒脈或は血脈と書き、三寶または種子印を畫いたるものと與へる。血脈を受けた人は大切に保存して、死亡の時棺中に納めて

夕霧阿波渡のこの文は、間山の唱歌である。「あひのやまを見よ」

げちめ 時平最初にげちめを取ら大(天神記)

〔天神記〕

分別「げちめを取られる」とは分別を取られる義。人に先を制せられて思慮する餘地なくなるべし。和訓栞に「異路の義なるべし。佛言集覽に「俗に人に逼迫して卑しめ凌ぐやうの事をゲヂメを食はずと云、又キヂメルとも云」。

げつかい 大師以來結界清淨の御山、假にも女犯の穢れがあれば一山荒れて震動し(萬年草)

〔結界〕法力によつて惡魔を入れぬ區域の意である。寺院また戒壇を造るに一種の作法を行つて、その區域を定めるところを結界と云ひ、その區域を結界地といふ。弘法大師行狀記。十に「惡神等は皆我結界七里の外に出去」。

げつかかさ 心身疲れ果て給ひ、結脚蹴坐して眠るが如く、延喜三年二月二十五日御年五十九歳にて左遷の雪と消え給ふ(天神記)

〔結脚蹴坐〕圓滿安坐である。足の表を蹴といひ、裏を脚といふ。右足を左脛上に置き、左足を右脛上に置き坐相を全脚坐と云ひ、右足を左脛上に置くのみなる半脚坐といふ。釋氏要覽に「毗婆沙論云、是相是圓滿安坐義」。

げつかる うそそうを見廻し巫女の門、こりや爰にげつかるとい引出せつかれ(丹波興作) 若い女中に立交り、三味線弾いて居りつか(堀山遊)

有る又は居るの意にひひ、總て人の所作を尋めていふ語。按じると「つか(縛)を強めて

「つかつつかば」つかつつかるといひ、更に轉訛してげつかるとなり、意味も上述の如く轉じたであらう。

げつげい 月桂野に收まつて云云(見よ)

〔月桂〕

〔月卿雲客〕卿相を月と譬へて月卿と云ひ、殿上人を雲に譬へて雲客と云ふ。貞丈雜記に、「公卿又卿相といふなり、又月卿といふ、殿上人をば雲客といふなり」。「げいしやう」うんかく(見よ)

げつこく 本懐遂げば關國二箇國安堵せんと頼まるる(持統天皇)

〔關國〕げつしよを見よ。

げつしよ 召人伊賀の介が家財關つたり(弘徽殿)

〔關所關所〕關國はもと領主の關つた土地また國をいひ、室町時代から桃山時代にかけての用語である。罪科や其他の事情によつて幕府に没收された土地や國は皆關所・關國である。江戸時代になつて轉じて、領地を没收するの罪名となつた。

げつちやう 染袴が驕のまなざし人人をきつと見て(酒吞童子枕書)

〔染袴〕支那上古の世、夏の桀王や殷の紂王は共に暴虐驕慢の君で、天下を亡したと史記に詳しく見えてゐる。

の夏までは兩袖の下を脚腋の脇明にして、熱を漏し涼しみを受けざれば國と人と相應せず(振袖拾)

〔脚腋〕和名抄に「和岐阿介乃古路毛」とある。四位以下の武官儀仗の日着する服であつて、袖より下兩腋を縫はず細をも附けずして、後の身を長く仕立てたるものである。

けづりまはし 芹摘を隠し置いたる削廻しはおのれよな(聖徳太子) 醉の蒟蒻のと品つけて、臆病第一の削廻し、踏殺しておれも死にたい(女夫池)

〔削廻〕小刀で削り廻すことせし水細工の裁より轉じて、小策を弄する者をいふ。

*けづる 夫は佛法けづるともそつと隠して回向しや(反魂香)

*けてん 吾妻はつとけてんして、夢見たやうな事どもやな(雀鱈) 兄弟二度けてんして鞠の無體に行詰り(持統天皇) 町中といふにぎよつとして、とむれつきたるけてん顔(女殺) 明日の貯へ何にせんと、立去らんとし給へば、龜井はあつとけてん顔(孕常盤)

驚きあきれること。普通「怪癖」と書けども、頭頭屋本筋用集に「化轉」と見えてゐる。化轉は四教儀に「化轉物心」とあつて、人を教化して善に轉せしめる義なるが、轉じて驚いて心を奪はれる意になつたのであらう。

*けてん 日夜内典外典に眼をさらし(室町千姫歌)

*けぞる うめが、こゝにあるからには

〔外典佛敎以外の書。〕内典をも見ら。

けづりまはし——けまはし

横笛も居る筈、けどつて早くも隠せしな(簞) 立花を望めば立捨てにして歸りしは、面面の言合せし某が企けどつたりと覺ゆる(聖徳太子)

〔氣取〕様子を見て早く悟り知る。俳言集覽に「けぞる。日しきとも也」。

*けな 日頃お側つぎの腰元衆によう思はれ、ああげな人ぢや氣の柔らかな男ぢやと千疋丈 調使殿よい所へござつた、鐵の桶ぢやけな人ぢや(聖徳太子) どれどれ三吉そこにか、まあまあそちばけな者ぢや(舟波與伴) 露よりけなる玉の緒の(大原問答)

〔異な〕殊勝な。藤原藤原集抄に「異物(ケナモノケノモノ)。下様之者を讀むる詞にけの物」と云は如何。日本紀に異の字をけとよむ、群に勝れ常に異なる由を讀る詞なれば其心叶へり。「露よりけなる」とは露よりもまじりてはかなき意。新古今集秋上巻、曾根好忠の歌に「おきて見んと思ひし程に枯れにけり、露よりけなるあまがほの花」。

けなし そも三枚はいさ知らず、取得んことばけなしなり(大羅冠)

〔毛無〕馬ならん(姿照)の懸札不在。道念師「浮世山叢しに」歌留多のかすが山……手から駆出す生駒山たまたまけなしと喜べし。謡曲海士のほとりも知らぬ海底に……も神變はさ知らず。取得んことば不定なり」を博奕詞でもちつた歌洒落。

*けならしい この蚊帳でしげらしやんしたらば、いかな蚊蚊もけなしかる(歌念佛) こなきなら弟の身で

けなりや機嫌がよささうな(二枚繪) 「けならしい」といひ、「氣の悪い」の轉訛した語で、心にくい義。うらやましい(羨)。この語現今備中國小田郡あたりで羨しいの意に用ふ。狂言記「ぬけからに」申し殿様身どもに此やうにお氣をつけられままするをば、傍輩どももいかにけなりや思ひまする」。

下馬先をする 御前が近い、競合はず下馬先をして振りませい(薩摩歌) 槍持 草履取などの供が下馬すべき所に近づけば、頭を少し屈め手先を上げて手を振り腰をひねり、足取揃へて歩くを例としてゐた、これを下馬前とすると云ふ。

けはしい やあ助右殿夜中にけはしい、何の用でござる。(大經師) いつにない、けはしい聲、何事かばと出でければ(孕常盤)

〔懸〕けはしい(氣惡の轉じた語であらう。物凄うて醒でない)著聞集に「とまりする波の風もけあしきに、波高きこの浦はいかにぞ」拾玉集巻一に「沖つ風けあしけれどるこぎ出ぬと、都の人にいかで知れせん」。

けはなし 門の流れけはなし(小栗判官) 白洲に生血流れたり(朱葉集)

〔臥放門の内外の區域を分つ溝のない教居で、とりはづしのできるやうに作つたもの。〕

けはらのうめ 「のけはらのうめ」を見よ。

けはらかす 袴の裾けはらかし禮儀をくづして責めかくる(振袖始)

〔くゑはらからす〕臥放の變つた語である。臥放す。神代紀上巻に「臥放。此云俱羅羅(新撰字彙)に「菟波良良志、又知留」萬葉集・卷二十に「あまをふね波良良にうきて」とあるを見ても「はらからす」は散す義である」。

*けびぬし かかる處へ檢非違使の某真先立ち、此處彼處にて召捕つたる海賊げら、傾城交り繩付ども一度に彼處へ引来る(博多)

〔檢非違使〕司法警察の事を牽り、非法非違の者を檢校糾察する役で、醍醐天皇の朝既に置かれてあつたが、別に使務がなかつたので、淳和天皇の天長年中に使職を置かれた。この文は殊更に平安朝時代の職を借りて云つたものである。これをまた大連の廳の官人とも書いてゐる。「だいら」を見よ。

*げぼん 西方淨土に一文字、越ゆる(下品下用横(卯月潤色) 下品下生の往生は六道四生の苦患をやや遁るるばかりにて、十二劫が其間運華中に孕まれ(大原問答)

〔下品〕薩摩淨土に九品の別ありて、其第七より第九までを下品といひ、第七を下品上生、第八を下品中生、第九を下品下生と云ふよくほんのじやうせつを見よ。觀無量壽經に「下品下生者、或有(衆生)作不善業五逆十惡、具諸不善、如此愚人、以惡業故、應墮惡道、經無量劫、受苦無窮、如此愚人、臨終時、遇善知識、稱念安穩、爲說妙法、教令念佛、此人苦過不過三念佛、善友告言、汝若不念、應稱十名、善佛、如是至心、稱念不絕、具足十名、稱三兩兩彌陀佛、稱佛名故、於三念中、除八十億劫生死之罪、命終之時、見金蓮華猶如三日輪住、其人前、如二念頃、即得往生極樂世界於蓮華中、滿十二大劫、蓮華方閉、觀世音大勢至、以大悲音聲、爲其廣說諸法實相除滅罪法、聞已歡喜、應時即發菩提之心、是名下品下生者」。

けまはし 肩から裾のけまはし

けまはし 肩から裾のけまはし

で(日本武尊)

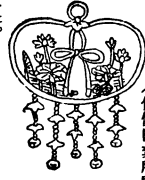
〔脚利〕袴又はうちかけなどの裾裏の足にかかるところ。

けんまんとけん 華鬘・寶鐸・瓔珞は西吹く風にのれいれいと、いとど殊勝さ限りなし(三世相)

〔華鬘〕佛像または堂塔の頂などに吊す飾である。佛像圖案に、

〔花鬘〕西域女子首飾也」とある

れは、もとは西域で女子の首飾に用いたものであった。



〔花鬘〕

けんもちる 此炬燵には狼があるさうなと、賊もちるを引倒し(露門松)

〔露門松〕臨りふみにじりする。

けんもちる 其器量の好きおぼへさ、道頓堀の若衆方、女方ひつさらへてもけんもちる、四國西國かくれもない夕霧といふ太方に近付くべし(た霧) いやいやけんもちるに堪忍せぬ、放して存分言はしやいの(花符)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんもちる けんもちるのぞめきの衆も鳴を静めて聴き給(扇八景)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

けんやけし さながら盗賊の所爲もやけき標板、めつきめつきと切破る(花符)

うよかけんといひ、「行く」を「行くけん」などといふ。
元亨利貞四徳 「乾は元にして亨る云云」を見よ。

げんくわ 生を變へても女の身は天に到ること叶はず、變成男子の法力にて男のげんくわを得させてたばせ給へとも(天神記)

けんけん 向ひ同士のけんけんともならず、茶屋の内借つて振濯いで進ぜましよ(女殺) 秘に隠してあの錢を遣つて下さる志、言葉ではけんけんと言つたれど、心で三度戴きし(女殺)

無愛想に撥けること。素氣無くかどかし無し。けんけんは體態で、慥眞邪體の意であるが、それに雉子が蛇などを見付けた時に、けんけんと呼きはらうと羽打つて撥飛はすことからの意も加はつた語であらう。まほろろにはねつる。などいふ語もこれから起つた語である。和訓栞に「羽昭の説に、雉子はげんげいと囁いてはらうと羽をうつつへり、今けんと呼べり。俳言集覽に「人にとげとげとあたるをケンケンスル」と云ふ。

***げんこ** 息杖の續かん程げんこ微塵にさいんで、ころりと腰にひつつげ(百合意) 親はなしい一文な氣づくなら取つていりけ(舟波興作)

〔拳固〕五の符腰。蓋し五指の握りなればらふのであらう。小野高尙撰「夏山雜談」卷之三に「五つの歌をげんこ云ふ。五の歌をげんこといへるは、五は既古切なればなり。百合

若大臣のこの文は、拳固(握拳)に五の符腰をいひかけたのである。
〔拳固取〕とは拳固餅をいひ、昔時東海道の道中筋で賣つた一個五文の餅である。西遊記・御前獨狂言(寶永二年刊)卷之二に「こびんまきはげちげちねぶられ、げんこ餅ほどはげたるを手作のなすみつたりと云ふ」。

***けんこん** 支那・天竺にいたるとも。乾坤を出でずんばよしや五年も十年も、命終らば一念の魂残つて本望遂げ(龍丸)

〔乾坤天地。易經說卦傳に、「乾爲天、坤爲地」。

けんさき つらつら世間の幻相を觀するに云云を見よ。
けんさきのなかじめ 劔鏃の中締に六尺模樣はぐるぐる、御紋も車は越後の村上(隨摩歌)

〔劔鏃中締、劔鏃(越後村上城主、桶原式部大輔勝乘の劔鏃)。
〔けんさきのなかじめ〕

けんさきぶね 繼子縁嫁孫君も憎や憎やと押出して、詞に尖る劔先舟、家中棍なぞ取りかたれる(實古發信)

〔劔先舟〕尖聲で取りかたれる劔先舟にひかけたのである。和漢船用集、卷五に「劔先舟。又劔先舟と書く、凡荷物十六駄を載す、大河内河内荷物運送の舟なり、古劔先舟在劔先新劔先舟の別あり、是所謂字彙に形如刀、故に劔と名付るの謂にて、形の似たるを以て名とす、長さ九尋餘深さ一尺四寸、直くして劔先尖り如、劔一枚にせよとも也、大船なれども板薄くして能く淺川を行く。この文劔

先舟の縁で「棍をぞ取り」というたのである。
けんさきりうごのかぎやり 劔鏃りうごの鈎鉤は伊賀伊勢の津の御城主(隨摩歌)

〔劔鏃輪鈎鉤〕劔鏃(津城主、藤室和泉守高睦の劔鏃)。
〔けんさきりうごのかぎやり〕

けんざん 親仁の店から錦手乾山音羽焼の、皿の鉢の茶碗のと十五六兩が乾山賣つてくれ(生玉)

〔乾山乾山焼の略、尾形乾山の焼はじめ大陶磁器の稱、尾形〕
乾山は元祿時代有名な畫師光琳の弟である、名を深省と云ひ、陶工で光琳の筆風を學んで一層自由であつた、寛保六年(八十一)江戸に歿した。菊園房行撰近代世事談に「乾山焼、尾形深省崎崎崎淵邊の土を以て焼はじむ、鳴瀧山は王城の、乾にあたり、よつて乾山を名とす」。

けんじくも 絳絹裏に源氏雲の裾ぐくみ(反魂香)

〔源氏雲〕源氏物語繪巻物に畫いてある洲濱のやうな雲をいふ、それに金箔を押したは刺繍にしたもの。遊遊笑覽、卷三、書畫の條に「今は彼洲濱のやうなる形を雲と覺えて、是を源氏雲といふはいとをかし、そは源氏物語をかける畫にのみあるものとするか云云」。

***げんじやう** 御身に添ふる物としては女上の琵琶一面、清行希世御供にて(龍丸) 女上、牧馬の琵琶二面取つて押合せ(源義經)

〔女上〕琵琶の名である。明天皇の承和年間、藤原貞敏遣唐使となつて唐に赴き、彼地より紫檀、紫藤の琵琶台一面を唐に持ち歸つたと云ふ。禁秘抄抄に「女上。累代寶物也、國中殿御扇、根源深人不知之、掃頭部員敏渡唐之時、所渡琵琶二面其一歟、紫檀直甲也云云」。

けんじやうのしやうじ 紫宸殿に賢聖の障子と名づけ、古の賢人忠臣の姿を繪に畫き給ふとや(五人兄弟)

〔賢聖障子〕紫宸殿の北にたてある障子で、支那三代より唐までの聖賢名臣の肖像を畫してある。古今著聞集卷十一、畫圖の條に「兩殿の賢聖障子は寛平の御時始めてかかれけるなり、その名臣といふは、馬周、房玄齡、杜如晦、魏徵(自東)、諸葛亮、連伯玉、張良、第三、伊尹、傅說、太公望、仲山甫、(同四)、李勣、虞世南、杜預、張華、(自西)一羊祜、揚雄、陳寒、班固、(同二)、桓榮、鄧玄、蘇武、倪寬、(同三)、董仲舒、文翁、賈誼、叔孫通、(同四)等也、此人物の影をかかれけり、云云」。

***げんじやうらく** 敵を討つて太平樂、還城樂や還俗樂、菩提の門を引かへて(安夫史)

〔還城樂〕唐土傳來の樂である。唐玄宗皇帝が韋后を誅して京都に還り、この曲を作つたので還城樂と名づけたといふ。拾芥抄に「還城樂、乞食調矣。以ての外の不吉の脇指、寸は一尺四寸五分、けん尺は

災難、これを其儘持つならば三代まで崇る(女腹切)

【剣尺刀剣佛像などは度るに用ひた物差。博物室に「剣尺一名玉尺といふ、俗名けん尺と云ふ、吉の字もとは本につくる、凡刀剣佛像の大け門戸のばばに皆これを用ゐ、當る所の吉凶圖の文字の如し、且八卦の文字を添ゆ、今用ゐるもの昔の寸と違ひあり、今用ゐるたけは曲尺一尺二寸を八段とし、一段一寸五分に際るなり。】

【財一病一離一裁一官一劫一害一吉】

【福徳遊魂、絶絶遊年、天醫絶命、禍害生家、一尺四寸五分は剣尺の遊魂(病)に當り、遊魂は周易、蘇詩傳に「遊魂爲變」と見え、形體が散亂して、形體を失ひ變化を來すことであつて、劍の長さの遊魂に當るは、災難あるものとして不吉である。】

*けんぞく お主が山へ登つたば末

は出家の筈なるに、今此山が出たといは遺俗したい心よな(萬年草)

【遺俗】俗信が再び俗人生活に還ること。

乾兌離巽子丑寅 一八卦を見よ。

【現當二世】現世と當來との二世。

けんたん 鶴岡の濱茶屋でけんたん

人買へつと、毒口苦口二口三口、

一口に言込められ(虎が屠)

【契短】間短とも書く。契の間短は儀である。夜寝また辻君の類である。八文字屋自笑撰、風傾性野群談(享保二年刊)五之卷、金銀を誦すは江戶風の條に、「かりにも契短遊びにこま銀をつかひて、分知願は井の内のかはつ」。同書三之卷、色遊びの一時

は千兩の金にやうやうの條に「たとは太夫をしびつてみる大盡、天職にかかつてあれば氣難なるべし、天職にさはたつてある客、鹿鹿か端をかふ程ならばよきへらよつかふまじ、それより段段におとり子を比丘尼、白人を茶目仕に仕、契短を辻君と思ひか、まば、期當せらるる處子もなく誦人(預けらるる手代もあるまじ)、とあるによつて見れば、享保頃までは同じ下等の賣女でも契短は辻君よりも一段上位であつたのである。後になつては契短も辻君も同じものになつたと見え、好色節用集(寶曆頃刊)に、「契短といふ、今けんたんといひ誤る、其あまりさま挽切りの枕木綿布圍、床に入りてはききもあわただしき事なり」と見えである。

けんちやう 倅仗兵士與の前後に兵

具を帶し(日本武尊)

【倅仗】平安朝時代に鎮守府將軍に隸屬してあつた職で、武器を携へて劔助めの家來。

*けんづく この道ばかりはけんづ

くに押せど押されぬ茨の枝(槍狩)

權づくの縁組存じも寄らず

候(心五戒魂)

【權】權勢。權勢にまかせて物を強ふること。

*けんづけ 今度上意を以て權附の

祝言、父が心にそまぬ上、姫もは

つと驚きて(千足犬)

【權附】權勢をもつて押附けること。浮世朝仁氣賀に「銀を貸した古手屋にて、權づけにゆきたけの合はぬ絹物をかりて」。

*けんどん それはお前のけんどん

と申すの、先夕霧様に逢はせま

しよ、いやとてけんどんなら夕

霧より蕎麥切に致さ(夕霧) ぢた

いの顔がにくていにけんどんに見

えるゆゑ(天經師) 或は饅餉けん

んの、そばで聞くさへ笑止なり

(二枚繪) 腹の立つたあげくちや

けんどんを取りにやれ(女腹切) 噂

日節季は前垂掛で、裏屋・背戸屋、

けんどん屋三界懸取に歩くやうな

勤するの、澤山に逢はう爲(生玉)

【懷賣】人の物をばしり人に物を通るををしがる義轉じて、懐賣強きことといふ。郭廳

【懷賣蕎麥切】いふのがある、懷賣はききみなき意で、一腕づつしたる食ふ人の心に任せて勤めもしない故の名である。この文に、「ともけんどんなら」「饅餉けんどんの」「けんどんを取りにやれ」とあるは、懷賣に懷賣蕎麥切をいひかけたのである。けんどん屋」は懷賣蕎麥切屋。懷賣蕎麥の起りにつきては、むかしむかし物語に「寛文辰年けんどん蕎麥切といふ物出来て下買食ふ、貴人には食ふ者なし」とあるから、寛文四年頃であらう。其價は一兩盛が六文から八文程であつた。喜田川生莊語(近世風俗志)に「或書云、寛文四年懷賣蕎麥切始て製之下、賜の食とす、價八文云云、又一書に貞享中江戶旅籠町蕎麥切一椀六文無掛直云云」と見え、嬉遊笑鏡に「懷賣は唯俗に屬えたるやきしみなき意にて、一腕づつ盛たるを食ふ人の心に任せて勤めもしない故の名なり」と見え、「其呼聲にも一杯六文かけたり」と見えである。

【懐賣紙料】下之巻に「懷賣」因果經と云和韻に云、人のものをばしがるを懷と云ふなり、人に物ををしがるを賣といふ、けんどんちよと見え、こゝに「こゝに説く所大むね法華經に見えたる懷賣の意に當れり」とぞ、今の俗語畫の強き事いふは誤にて、吾きことなり、されば蕎麥切にもあれ飯にもあれ、盛切つて

出しかりをも勤めざるけんどんといふなりと書き、延寶天和頃の京都四條川原畫巻を寫して載せてある。この形の物に、



姐の側に人が居る。

後には懷賣の意義を轉じて饅餉のことに取り遊女の名にけんどんと云ふのもあれば、また酒にけんどんと云ふものも出来た。傾城吉岡染に「こまか切のけんどん酒」といふ詞も見えてゐる。

けんなり こちやけんなりとなる程

八めばいきつて、馬を取つたとし

がみつく(丹波與作)

「くねり」くねり「ぐなり」「ぐんなり」「げんなり」と轉訛した語である。氣力を失うて屈する。うんざり。

けんによまない 手形を顔へ打付

け、はつたと腕む顔付はけんによ

もなげにしらじらし(會根崎) 犬も

歩けばばう風の指身の、けんによ

もない仕合せと(實古教信) 二人は

左右へ取附いて、そなたとはけん

によもなく、人音がするならば此

半櫃へ隠れよと(聖徳太子) 目の鞘

はづす刀の血痕押拭ひ押拭ひ、袖

にをさめし顔容、けんによな

り引締ひ、物音伺ひ立つたる

は(女護鳥)

【懸念】「けんんまなけん」といひ、「けんん」を説つて「けんん」といふ。「けんによな」は「懸念を無し」であつて、思ひがける無しの意「けんによな」なるものなり。貝原好古撰、醒睡(元祿十四年刊)卷之五に、「權輿。今俗に始めなく不圖出来たる事をけん

んよまなきといへるは此字なり」といひ、その正癖の條に「無慮念。思ひ懸けなきなり、けんによまなきは誤一見えてゐる。か九言(慶安三年刊)に「けんによまなき事といふ言葉は如何、すべておもひがけもなき事に言言はせり、若し無慮の文字か、又は權輿が本説なる由云へり。權輿は物のはじめの義であつて、この語意に當りなやである。西鶴翁「好色一代男」卷四、因果の閑守の條に「花の都のぬめり節、長い刀に長脇指をばつて、おせきよきと唄へど、けんによまなき願ひある」。錦文流撰「傾城」花形に「よし可愛い女房をそめきをも動めさせて、其金で身命がどら懸がるものなるぞ、いやはやけがる一言とけんによまなき願ひなり」。

けんねじ 傍輩どもがけんねじついで銭儲けする羨しさ(丹波與作)互に揚拳を突出して掌中の物の歌を拵て勝負をする戲であつて、博奕の一種である。高田興清撰「松屋審記」卷六十五、拳を打の條の頭注に「福泰が筆のすまび上巻四丁才に、拳をうつ事を漢土にては擲陣と云、又にきりこぶしにてするけんねじなことを云ふ戲を擲拳と云、擲はたがふ事なり、故にけんねじのを擲きし體籠を體籠といふ、明皇雜記に見ゆ云「けんねじ」は「けんねじ」とも云ふ。享保集成線稿録、四十九、慶安元年二月の條に「前前より被仰付候はくも、はうびきけんねじがるた、何に而も諸務貴堅仕間敷事」と見えてゐる。「さんまいせち」の條をも見よ。

けんのか 晴明が祈る川水直に離れず流るるは乾の卦の形、所謂乾道(乾卦乾乾)は陽である。人に當てて男子とす。

けんねじ — **けんらうちしん**

けんばふ 白無垢一重けんばふに、裾襖練ある慮に驚(大經師) 本郷に大店借り、吉岡染憲法と世に流るる根本は、此せがれが父親なり(吉岡染)
〔憲法憲法染の略。附子糖漿を原料とした黒茶染。京復(寛文五年刊)に「親小路下るけんばう町。中頃けんばうの某とか云ふ者黒茶染を仕出しけり、この故にけんばう染といふとにや、この町に住みければ町の名とす」と見えてゐる。憲法は兼房とも書き、通稱を吉岡仁左衛門といひ、吉岡流剣道の祖と傳へられてゐる。この人の發明した憲法は明徳から延寶にかけて大に流行した。傾城吉岡染に、石川五右衛門と師弟の關係があつたこととに書いてあるは、無論事實ではなうて、全くの他人の關係である。〕

けんぶくしや 浦島塚として壽命を守るけんぶくしや(松風)
〔現福善書に現福者といひかけたのである。靈驗よく現在に福徳を授ける神。〕

けんぶくしや 我昔の元服よしの日取もよしや(大經師)
〔元服吉(舊曆上の語で、元服するに吉といふ。この文は大經師に載ある舊上の語盡しを飾つた祭文である。なほこの文に、蓮に驚)とあるは、其福徳の著物であつて、當時この福徳流行したので、女用訓蒙圖彙にもこの福徳の衣服が書いてある。〕

けんべき この頃疔癩痛きにちつと掴んで貰ひたし(田世長清)
〔疔癩(頭)か顔及び肩にかけて筋肉の時時ひきつる病。醫心方に「疔癩之疾亦不專於云一、癩病者肝之所生、癩病者脾之所成、云云」とあれば、もともと腹部の病症である。〕

けんぼう 「けんばふ」を見よ。
けんぼうがなし 園には玉の梢を連れ、西王母が桃けんぼうが梨、不老の櫻爛漫と(松風)
〔蘇州が蘇州に神仙の住める山の名。その山に生ずる梨。楚辭注に「崑崙山名也。其尻安在」とありて王逸注に「崑崙山名也。在西北元氣所出、其顛曰崑崙、崑崙乃上通於天也。山海經に、崑崙丘有木焉、其狀如棠、而黃花赤實、其味如李而無核、名曰沙棠。〕

けんぼくぼ 父様とのかためで嫁入つて来たわしなれば、此腹の子は此方の子、親旦那と三つがなわで、けんぼくぼ晴れて産んで見し(酒吞童子)
〔世間を憚らず表立つこと。公然。正章貞室撰、か九言(慶安三年刊)に「憲法をけんば、またけんぼくぼのぼは公法といふことか」小柴垣(元祿九年刊)卷之三、畫の夢さめて現の條に「和尓もよそか持て来る無用しばかりを請けにあらはれよけれども、無用の茶小姓抱へ置き、若葉髪に中制して刀脇差よこたへさせ、けんぼくぼはれて置かるるは何れ大膽なり」。天正版御用集に「憲法一公道義用し」〕

けんみ 兄上のけんみ少を助け、子孫も繁昌致すべし(賀古教信)
〔現未現在と未來。現當二世。〕

けんみやく 御病氣見脈に顯げられた奇なるかな(振袖也) 都の善人惡人は某がけんみやくでも一寸遣らず、斬れば斬る助くれば助くる(日本談)
〔見脈(脈搏)を檢すること、以て見立てに云ふ。〕

けんもじ どうもどうも鬼の娘に御げんもじ(龜山遊)
〔見文字見夢の文字詞。見夢。文字詞についてはともじの條を見よ。〕

けんもんやみ 六根氣血通ばねばけんもんやみに異らず(小栗判官)
〔見聞(目)に佛を見、耳に妙法を聞くことが出来ないう、常に迷妄の間にまよふと、飢餓に泣く餓鬼類をいふ。見聞は見聞成佛、見聞覺知などいふ見聞で、佛典に見える語である。〕

けんらうちしん 堅牢地神の頂へ駒の蹄は届くとも(加増曾我) 不孝の上の不孝の科日月の怒を受け、堅牢地神は大地を破り奈落に沈め給ふべし(卯月調色) 手を出して双親を殺すも同じ不孝人、堅牢地神の頂きに釘を打つとの教あり(永明日)
〔堅牢地神(大地)を堅固ならしめる神である。この神は經典流布の處を常に護りて、形を法座に懸し、説法者の足を頂戴し、聞法者をして甘露を服するが如く身力を増進せしめると云ふ。地藏經に「佛告地神云、閻浮土地悉蒙汝護」。舞の本、和酒酒齋の條に「觀の不孝と申すは私ならぬ事なり、三千大千世界を戴いてまします御名を堅牢地神と申す。釋尊問ひたまひけるは、三界はいか程重きぞと問ひ給へば、地神答へて宜ふ、須彌の山に燃心して筋儀きたる、嗚よりのなほ輕く候が、雲に重き物あり、觀の不孝を得、主の勘當降りたる者の通る時、大地が割れてみがいればあ

けんらうちしん

たりの草木枯れ果て、川を渡るにせこえし底のうろくづも生を滅し、地神はかうべに七尺の剣を立つるより堪へ難しと宣へば、釋尊も阿彌陀佛・三世の諸佛たち舌をまいてぞ怖ぢ給ふ。

けんろー 或時は騫驢に鞭打つて衣を西山の雨に濕し(持統天皇)

「騫驢」ちんばの驢馬。楚辭・七諫に、「騫驢驢而無策谷」とありて註に「騫、駘也。」

こあげ

こあげ 四五町か六七町何とぞして昇き給へ、小揚に安う賣付けん(西玉母)

「小揚」色道大鏡巻一に「こあげ」竹輿乗物を昇く正夫をさして、田舎の舟著に有て荷物運ぶ正夫どもを中衆など云ふ名目あり、是等をこあげとも云、嘗道にて朝夕馳へ通ふ騫驢界の類をこあげと云ふなり。

*こあんす、こなさん聞えやせんぞえ、前ば再再ごあんして、何が恐うて逃げさんす(二枚繪)

*こいしがしら 碁石頭に白黒の絲毛の鎧(三國志)

「碁石頭」この名の未だ他書に見當らな。思ふに兜の鉢に碁石のやうな凸形の小點數個あるものか。

こいとねり こいと煉として人もきく屋が名譽名物(千正次)

「小絲柳」埴賀の根を加へて煉つた餡、即ち埴

糞煎である。小絲地糞煎は元祿時代大阪天神の神社の前にあつて、有名な船屋の菊屋で賣つてみた。岡田侯志編「攝陽群談」巻十六、名物土産の部に「小絲地糞煎。天神社衙門の南にあり、始めて所作之婦人名曰小絲」の語に出、因號之、口味甚宜く、諸國の市店に送る。「菊屋が名譽名物をも見よ。」

*こいてん あゝ障子へ雛を並べた如くにて映る影を見給へ、五音で内へ知らすれば(本領會談)

いひて目は涙、さすが五音で推量し(永朝臣) その五音で殺手は知れた知れた(振袖廻)

「五音」官・商・角・徴・羽の五音をいひ、轉じて、聲色(言葉)つき。

こいんじゆ 胡飲酒酣醉樂など舞樂を奏し(女護應)

「胡飲酒」歌舞音樂略史上巻に、「胡飲酒(壹小)一名宴飲樂、或説に胡國の樂なり、胡人酒を飲む時の姿を携して舞曲とす、即ち舞人持つ所の袴は酒袴なり」とあり、一説に、仁明天皇の承和中勅を奉じて、樂は大戸ノ清七、舞は大戸ノ麗舞作ともいふ、然らば本朝に於て改作か(數訓抄)。

こう 大事の姫が死したれば、元もこも無くなつて御褒美の段でなし(持統天皇)

*こう(子)を「こう」と延べた語である。「元もこも」は元利も。

*こうごう ちよはどの、この者ならば惜しいこと、侍にして召使ひたし(三國志) 助給打笑ひ、ええ、こうにも立たぬ情氣ちやなう(卯月潤色) なう鎌田殿、保元平治の合戦に多くの敵に向うても薄手もおおはぬ功

の武者、運盡きぬればむざむざと(鎌田) 庄司が子供は功の者、お頼もしく頼もしく(津戸三郎)

*こうけん 親のこうけん是非なうて、どうなりともと言ひました(萬年草) そこの男のこうけん、貴人高位の娘でも夫が去るに何と申すぞ(曾庚申) 是非とも親のこうけん

在在所の男侍ならば、己や死ぬるが合點か(今宮)

こうざらし「じやうし」を見よ。

こうしや 恒沙の眷屬引連れ(松風) 名號の六字にこうしやの功德備はるなり(大原問答)

「恒沙」恒河沙の略。印度の恒河(गङ्गा)の沙數の如く無數なるをいひ、濱の眞砂といふ。同じ。華嚴經に「現在十方佛、其數如恒沙」とあり。

*こうた 三味線小唄も古めかし(女腹切)

「小唄」俳曲の一種である。歌曲の長いのを長唄といふに對して、その短いものを小唄も九は唄唄といふ。松の葉(元祿十六年刊)に唄唄を分けて、本調子二あり、三さがり及び騫ぎの四種にしてある。この唄唄は現今云へる唄唄とは別である。

*こうたう こうたうな兄御を手本にして、商人といふ物は一文錢もあだにせず(女懸) 所帯じみて氣がこうたう、好い女房にいかい疵(女懸) 器量に似合はぬ(こうたうな

堅くろし偏窟な生れつき(大經師) 心のたまかき(こうたうな) (歌念佛) 「公道はなやかならぬこと。じみ。羞。但言集覽に「公道。おとなしきとは物の公道なる心なれば、花やかならぬをいふなるべし。」

*こうたびくに 紀州熊野にはよき奉公の口ありと、聞くをしろるべに立越えしに、それは小歌比丘尼とて尼にするよし承り(百日曾夜)

「小歌比丘尼」熊野勸進比丘尼をいふようたびくに」を見よ。

こうとう 「こうたら」を見よ。

こうにんかくしき 弘仁格式の掟。聖代の古風を仰ぎ、佛法に御歸依あり(饑饉天皇)

「弘仁格式」三十卷ある。饑饉天皇の勅を奉じし藤原多朝等の編纂したもので、朝廷官府の格式規定故事舊例等を録してある。

こうはい 紅梅竹河(橋姫(淀姫)) 「紅梅」源氏物語五十四帖の一。

*こうめい 幼心に孔明が昔に耳にふれつらん(女櫛)

「孔明」諸葛孔明は支那三國時代益州陽都の人である。軍略に長じ、蜀の昭烈帝に仕へて丞相となり、武侯侯に封ぜられた。曾て後主に奉つた前後の出師表は人のよく知る所である。

*こうや あつち町の(こうや)へよつて錢とりや(曾根崎) 代代傳はる(こう屋)のかたと共に売げたる頭を(おろし(重井筒)) 口を止めたる(こうや)のり、徳様早うと出でにけり(重井筒)